宜蘭クレオールの語彙の様相
――東岳村の場合――

The lexicon of Yilan Creole: the case of Tungyueh Village

簡　月真
Yuehchen Chien

台湾・国立東華大学
National Donghwa University, Taiwan

Abstract: This paper describes the lexicon of a Japanese-lexifier creole, Yilan Creole, which is spoken by Atayal and Seediq people living in four villages of Yilan County, Taiwan. This paper reexamines the lexicon based on data collected from three generations of informants in Tungyueh Village. The analysis confirms that Japanese is Yilan Creole's superstrate, Atayal is its substrate, and Mandarin and Southern Min can be considered adstrates. The analysis also indicates that the substrate language contributed most of the lexical items for body parts, and the superstrate language contributed pronouns and function words. Yilan Creole also preserves some words of Atayal and Japanese dialectal origins. Through an examination of the process of word formation, the paper clarifies that -*suru* is becoming a verbal marker, and that there are a limited number of compounding words and abbreviations. The paper also discusses different types of semantic change, such as semantic broadening (including relexification) and semantic narrowing, to explore the processes of the formation of the Yilan Creole lexicon. The younger generation uses the verbal marker -*suru* and clipped forms more than the older generation does. In addition, there is evidence of semantic change in all generations' lexicons, with that of the younger generation showing the most innovation.

Key words: Japanese-lexifier creole, Atayal, word formation, semantic change, variation

1．はじめに

宜蘭クレオールは、日本の植民地統治（1895～1945年）によって台湾に渡った日本語がアタヤル語・セデック語[1]と接触したことによって形成された新しい言語である。この新しい言語は、台湾東部の宜蘭県に住む一部のアタヤル人とセデック人によって用いられている。その主な使用地域は、宜蘭県の東岳村・金洋村・澳花村・寒渓村の４つの村である。Chien & Sanada（2010）と簡・真田（2010）では、使用地域にちなんで、このクレオールのことを「Yilan Creole（宜蘭クレオール）」と命名した。宜蘭クレオールの言語の形成にかかわる歴史

的・社会的背景やクレオールとしての認定に関しては、真田・簡（2007）、Chien & Sanada（2010）などで論じている。

宜蘭クレオールは、1910年代から発生し、1930年代生まれのアタヤル人とセデック人の第一言語として使用されてきたと推定される（Chien & Sanada 2010、簡・真田 2010）が、現在においては1980年代生まれ以降の世代の多くは宜蘭クレオールが話せなくなっている。ただ、澳花村と寒渓村には1990年代生まれで流暢に話せる若者がいることがこれまでの調査で明らかになっている。このように、世代間の伝承において村落間に違いが観察されるのであるが、宜蘭クレオールが現在は社会的に優位に立つ華語に脅かされて、受け継がれなくなりつつあることは間違いがない。なお、４村の人口数は合計約3,000人である[2]が、正確な宜蘭クレオールの話者数はわかっていない。

本稿では、宜蘭クレオールの語彙を取り上げる。宜蘭クレオールの語彙に関しては、これまで、真田・簡（2007・2008）や安部ほか（2008）、Chien（2015）、真田（2015）で論じられてきた。真田・簡（2007・2008）および安部ほか（2008）では、同じ教科書を資料に用いて考察を行っている。しかし、体系的な記述がなされたとは言えず、また、教科書という性質から必ずしも話しことばの実態が捉えられているわけではない。その後、Chien（2015）、真田（2015）では、フィールドワークに基づいて語彙について考察しているが、いずれも高年層を対象としてはおらず、宜蘭クレオールの一部しか明らかにしていない。そこで、本稿ではすべての世代を対象にした考察を行う。具体的には、Chien（2015）をもとに、そこに高年層などのデータを加えて、考察を深めていく。

以下、第２節で調査の概要について説明する。続く第３節で宜蘭クレオールの基礎語彙調査を基に意味カテゴリー別に語種の比率を明らかにする。第４節で方言要素の存在を述べる。そして、第５節で派生や複合、短縮といった語形成のプロセスについて考察する。その上で、第６節ではバリエーションも視野に入れつつ、意味変化のあり方を分析する。第７節はまとめである。

なお、宜蘭クレオールの音韻体系は、基本的に周辺の村で話される伝統的なアタヤル語と同様なため、宜蘭クレオールの表記に当たっては、アタヤル語表記法に従う[3]。また、華語はウェード式、閩南語は台湾閩南語ローマ字[4]で表記する。

２．調査概要

本稿で用いるデータは、宜蘭県南澳郷東岳村（図１参照）において、2008年から2018年にかけて断続的に行なったフィールドワークで集めたものである。データ収集は主にインタビューで語彙の形式と用法を引き出す方法で行なった。また、自然談話収録および参与観察も行い、

図１　調査地点－東岳村

表１　インフォーマント一覧

移民世代	インフォーマント略号	性別	生年
二世	KFS	女性	1934
	HFS	女性	1939
三世	SFT	女性	1947
	AMT	男性	1951
	GMT	男性	1964
	DFT	女性	1966
四世	BFF	女性	1968
	YFF	女性	1974

※インフォーマント略号は、名前・性別・移民世代の順に示した。女性はF、男性はM、二世はSecondのS、三世はThirdのT、四世はFourthのFで表す。

実際の言語使用を確認している。

インフォーマントは1934－1974年生まれの、東岳村生え抜きの宜蘭クレオール話者で、計８人である（表１）。1913年から、もともと南澳郷の山奥に住んでいた人々が日本植民地当局の政策によって東岳村に移り住んだ（宜蘭廳 1918）が、当時の移住者世代を移民一世と定義すれば、インフォーマントKFSとHFSは二世にあたり、SFT・AMT・GMT・DFT は三世、BFFとYFFは四世である。

二世のKFSは日本語教育３年間、HFSは１年間受けており、幼い頃から、両親からは日本語にアタヤル語が混じった言語で育てられたという。三世のSFT・AMT・GMT・DFTと四世

のBFF・YFFもtang-ow no hanasi、tang-ow no ke（「東澳（東岳）の言語」の意）のなかで育った。インフォーマントは全員宜蘭クレオールを第一言語としている。インフォーマントたちの現在の言語生活状況を、筆者の実地観察に基づいて大まかにまとめると、表２のようになる。

二世は二世同士や次の世代の三世には宜蘭クレオールを用いるが、二世同士では偶にアタヤル語を使うことがある。四世には華語を交えることがあり、五世には華語をより多く使う。三世も二世に対しては宜蘭クレオールを用いるが、三世や四世には華語を交えることがあり、五世には華語をより多く使う。四世は二世と三世には宜蘭クレオールを主に用いて時に華語で話すが、四世同士では華語を主にして時に宜蘭クレオールで話している。五世との会話は華語に切り換えている。五世はすべての世代に対して華語で話している。この表から、宜蘭クレオールが華語へシフトしつつあることも読み取れる。

表２　インフォーマントの言語生活状況

話し手＼聞き手	二世	三世	四世	五世
二世	△	○	◎	▼
三世	○	◎	◎	▼
四世	◎	◎	▼	●
五世	●	●	●	●

凡例	
△	宜蘭クレオール＞アタヤル語
○	宜蘭クレオール
◎	宜蘭クレオール＞華語
▼	華語＞宜蘭クレオール
●	華語

３．宜蘭クレオールの基礎語彙にみる語種

ある言語の語彙総体のうち、もっとも根幹（核ともいう）をなす部分を「基礎語彙」とよぶ（亀井ほか 1996）。宜蘭クレオールは日本語を上層（語彙供給）言語、アタヤル語を基層言語、閩南語と華語を傍層言語とするクレオールだとされている（Chien 2015）。まず、それを基礎語彙がどの言語由来の語によって構成されているかを見ることによって確かめる（3.1）。次に意味分野による語の出自の違いについて考察する（3.2）。なお、この節の考察は、亀井ほか（1996）に掲載されたSwadeshの基礎語彙219語を用いた調査結果に基づく。

3.1　基礎語彙の語種比率

宜蘭クレオールの基礎語彙には、アタヤル語、日本語、華語、閩南語由来の語が取り込まれているが、どの言語がどれくらいの比率を占めているのか見てみよう。調査結果を語種別にまとめると、表３のようになる。

表３の横軸の欄に二つ以上の言語が入ることがあるが、それは、その語彙項目に二つ以上の

語種の単語が用いられることを示している。例えば、三つ目の欄に「アタヤル語・日本語」があるが、それはアタヤル語由来の単語と日本語由来の単語が併用される語彙項目の数である。したがって、宜蘭クレオールにおいては、アタヤル語由来の単語と日本語由来の単語が併用されている語彙が101項目であるということがわかる。

表３　宜蘭クレオールの基礎語彙の語種比率

宜蘭クレオール＼由来言語	アタヤル語	日本語	アタヤル語 日本語	アタヤル語 華語	アタヤル語 日本語 華語	日本語 華語	日本語 閩南語	日本語 閩南語 華語	合計
基礎語彙	20	68	101	2	15	11	1	1	219
%	9.1%	31.1%	46.1%	0.9%	6.8%	5.0%	0.5%	0.5%	100.0%

表３から、宜蘭クレオールの基礎語彙では、アタヤル語のみに由来する単語は9.1%、日本語のみに由来する単語は31.1%を占めていること、アタヤル語由来の単語と日本語由来の単語が併用されている項目は全体の46.1%であること、そして、華語由来と閩南語由来の単語が少ないながら用いられていることなどがわかる。

このように、宜蘭クレオールには日本語とアタヤル語のほかに、華語と閩南語の要素も混じり合っている。しかし、歴史的背景を鑑みると、これらの言語は同時に接触したものではなく、クレオールの形成にかかわったのは、日本語とアタヤル語[5]である（1910年代）。閩南語や華語との接触は、宜蘭クレオールの形成後のことである（1945年以降）。こうした歴史的背景および各言語由来の語彙の占める割合から見ると、宜蘭クレオールでは、日本語が語彙供給言語（上層）、アタヤル語が基層、そして、華語と閩南語が傍層となっていることが認められるのである。

二世のデータを加えることによって、Chien（2015）で記した各言語の比率とは少々異なってきたが、日本語からもっとも多くの語彙を取り入れており、アタヤル語が基層言語、華語と閩南語が傍層であることに変わりはない[6]。

3.2　意味分野による言語の分布

次に、各語種がどのような意味分野[7]の語彙に分布しているのかを見てみよう。表４に示したように、アタヤル語由来の語彙がもっとも多く用いられているのは身体名称で、日本語由来の語彙がもっとも多く取り込まれたのは代名詞と機能語である。アタヤル語由来の語と日本語由来の語の併用は代名詞と機能語を除くすべての意味分野にみられる。なお、華語と閩南語由来の語が使われるのは、主に「人物・自然・植物・動物・動詞・形容詞・空間」などの内容語である。

表４　意味分野に見る言語の分布

意味分野＼由来言語	アタヤル語	日本語	アタヤル語 日本語	アタヤル語 華語	アタヤル語 日本語 華語	日本語 華語	日本語 閩南語	日本語 閩南語 華語	合計
身体名称	10	3	15						28
文化語	1	1	1						3
人物			6		2				8
自然	2	8	8	1	4	4			27
植物	1	1	4		3			1	10
動物	3	1	7	1	1	1			14
動詞	2	23	24		2	2			53
形容詞	1	9	27		3	2			42
空間			2			2			4
時間		1	2						3
数			5						5
代名詞		14					1		15
機能語		7							7
合計	20	68	101	2	15	11	1	1	219

身体名称は言語消滅のプロセスの中で一番喪失しにくいものと言われることもあれば、逆に喪失しやすいとの報告もある（Craig 1997）が、新しく誕生した宜蘭クレオールにおいては身体名称に基層言語のアタヤル語が根強く残っている。代名詞には人称代名詞や指示代名詞、疑問代名詞が、機能語には格標識や助詞、否定辞が含まれるが、すべて日本語由来の語が取り入れられている。なお、一人称代名詞単数形には日本語のほか、閩南語由来の形式も取り込まれ併用されている。

では、一つの語彙項目に二つ以上の語種の単語が用いられることについて見てみよう。「身体名称」を例に挙げると、この意味分野には、muyux‘血’、nguhuw‘鼻’、ma'uy‘舌’、muyiy（kakay）‘腿’、tari‘膝’、kamin（kaming）‘爪’、puga‘へそ’、gyus（gisi）‘腸’、olu‘首’、turu‘背中’などのように、アタヤル語由来の語だけが使われるものもあれば、cyuba‘唾’、mune‘胸’、sinzyo‘心臓’などのように、日本語由来の語だけが使われるものもある。一方、kyahing（hey）/hihu‘皮膚’、hey/niku‘肉’、b'ni/hone‘骨’、yunux/kaminoke‘髪の毛’、tunux/atama‘頭’、papak/mimi‘耳’、royi/me‘目’、ngowa/kuci‘口’、ngowa/kucibiru（kuci）‘唇’、kakay/asi‘足’、'ba/te‘手’、'ba/ude‘腕’、ktu（nbwas）/hara‘腹’、bubu/opay‘乳’、sigit/kanzyo‘肝臓’などのように、アタヤル語由来の語と日本語由来の語が併用されることもある。同じ意味を表すこれらのバリアントは、コミュニティーの中で競合しつつ併存している。これらのバリアントには、話者個人内部のバリエーションとして存在するも

のもあれば、話者間のバリエーションとして存在するものもある。話者間のバリエーションとしての場合、たとえそれらは自分の使用語彙でなくても、理解語彙ではあるため、日常会話に支障をもたらすことはない。これは、インタビューの際に、自分は使わないが年配の人や若者などほかの人が使うといったインフォーマントの内省からもわかる。また自然談話および参与観察の結果からも確認される。

なお、上述のように、アタヤル語由来の語彙がもっとも多く用いられているのは身体名称であるが、そのほかにアタヤル語が残りやすい、つまり、アタヤル語由来の語だけの使用がみられるのは、「文化語、自然、植物、動物、動詞、形容詞」などの意味分野である。「文化語」とはhoku‘杖’、「自然」はurow‘土’、timu‘塩’、「植物」はyula’‘木の皮’、「動物」はngungu‘尻尾’、kumus(kumis)‘羽毛’、kumus(kumis)‘毛’、「動詞」はkukuysuru(kkuysuru)/kmamingsuru‘掻く’、luyaksuru‘猟する’、「形容詞」はkiyey‘乾いた’などである。いずれも伝統的な生活と密接に関わる項目であることから、日本語などが入り込まなかったのだと考えられる。

4．方言要素の存在

宜蘭クレオールには、アタヤル語の方言由来の語彙、および、日本語の方言由来の語彙が取り込まれている。それぞれについて見てみよう。

4.1　アタヤル語の方言

アタヤル語は大きくスコレック方言とツオレ方言に分類される（土田 1988、黄 2000）が、宜蘭地域で使われるアタヤル語ツオレ方言はほかの地域のツオレ方言との差異が顕著であるという理由から、2007年に新しい方言「宜蘭ツオレアタヤル語」として政府によって認定され、原住民族語の能力試験に加えられている。本稿の考察対象としている東岳村で話される宜蘭クレオールには、この「宜蘭ツオレアタヤル語」の要素が取り込まれている。例えば、人のことをcyoli、血のことをmuyux、魚のことを’cyux(icyux)、鶏のことをwelungと言っている（ただし、スコレック方言由来の単語も散見する。例えば、ngasan(ngasang)[8]‘家’などである)[9]。

東岳村は1913年以降、山奥から麓への移住が始まったのだが、その変遷（表５）を見ると、東岳村はツオレ方言を話すアタヤル人とタウサー方言を話すセデック人によって構成されていたことがわかる。しかし、タウサー方言を話すセデック人はマイノリティのために、ツオレ方言が優位に立ち、東岳村では宜蘭ツオレアタヤル語の要素が取り込まれたのだと考えられる。

表５　東岳村の変遷

現在の名称	移住後の集落名（日本植民地時代）	移住前の集落		移住時期
		集落名	使用言語	
東岳村	上東澳社	ゴーゴツ社	ツオレ方言＋タウサー方言	1913年
		キンノス社	ツオレ方言＋タウサー方言	1913年
	下東澳社	タピヤハン社	ツオレ方言	1913年、1923-24年
		ブター社	ツオレ方言	1913年

※上東澳社と下東澳社はそれぞれ上タンオウ社、下タンオウ社とも表記された。
※ツオレ方言はアタヤル語、タウサー方言はセデック語である。
※表は簡・真田（2010）より引用したものである。

4.2　日本語の方言

宜蘭クレオールの日本語起源の語彙は、基本的に標準日本語であるが、西日本方言形式も取り入れられている。例えば、wasi‘私’、otocuy‘一昨日’nasubi‘茄子’、kiyasu‘消す’、taku‘炊く’、hawaku‘掃く’、oru‘いる’などが用いられており、また、アスペクト形式-toru、否定辞-ng、禁止の意を表す-tekangといった形式も観察される。これらは西日本方言「わし」「おとつい」「なすび」「消やす」「炊く」「掃わく」「おる」「～とる」「～ん」「～ていかん」に由来する形式である。

これらの形式は、1895年から1945年までの日本植民地統治時代に西日本から台湾に渡った移住者（警察や教師、官吏、労働者、農民）によって持ち込まれたものと考えられる。日本統治時代、台湾在住の日本人の人口は台湾全人口の約５％を占めていたが、そのうち、約70％が西日本出身者であった。その人数は、多い順に、鹿児島、熊本、福岡、広島、佐賀、長崎、山口などとなっている（台湾総督官房臨時国勢調査部 1937）。川見（1942）では、九州出身者の話す日本語が台湾人の話す日本語に影響を与えていると指摘している。つまり、台湾人が話した日本語には、九州方言の要素が観察されたのである。当時の教科書を見ると、学校では標準語が教えられていたと言えるが、西日本出身者が標準語を話す際に、母方言の要素を混じえて使っていたのではないかと考えられる。そして、その使い方がそのまま台湾の人たちの日本語にも影響を与えたのである。現に台湾各地の高年層が話す日本語の中には西日本方言の要素が入っている（簡 2011）。宜蘭クレオールの語彙供給言語は、基本的には標準日本語であるが、そこに西日本方言の要素が取り入れられているのである。

５．語形成のプロセス

宜蘭クレオールの語形成の主なプロセスには、派生、複合、短縮などが挙げられる。多くのクレオールにおいて、生産的な語形成のプロセスとして重複が指摘されている（Hancock 1980、Holm 2000）が、重複は宜蘭クレオールには見られない。

5.1 派生

本節では、新しい単語を作り出す主な派生形態素-suruを取り上げる。宜蘭クレオールでは、接辞の-suruが動詞を作り出す手段として生産的に用いられている。-suruは日本語の「する」由来の形式である。日本語では、「する」は独立した意味を持つ動詞で、動名詞に付加して「運動する」「研究する」などのような複合動詞を作ることもできる。

(1) に示すように、宜蘭クレオールでは、語種に関係なく、上層言語由来の形式・基層言語由来の形式・傍層言語由来の形式がすべて-suruに前接できる。また、語の品詞に関係なく、接尾辞-suruが付加できる。

(1)

No.	宜蘭クレオール					出自言語			
	形式	意味	使用者			言語	形式	意味	品詞
			二世	三世	四世				
1	kusisuru	梳く	○	○	○	日本語	くし	櫛	名詞
2	yumesuru	夢を見る	○	○	○	日本語	ゆめ	夢	名詞
	(yume miru)		○	×	×				
3	bakusuru	タバコを吸う	○	○	○	日本語	たばこ	タバコ	名詞
	(tabako suw)		○	△	×				
4	tmmyangsuru	肉の漬物を作る	○	○	○	アタヤル語	tmmyan	肉の漬物	名詞
5	pkyawsuru/pakyawsuru	賭博をする	○	○	○	閩南語	puahkiau	賭博・賭博する	名詞・動詞
6	kanmawsuru	風邪を引く	○	○	○	華語	kanmao	風邪・風邪を引く	名詞・動詞
7	tangkisuru	怒る	○	○	○	日本語	たんき	短気だ	な形容詞
8	kiluxsuru	温める	○	○	○	アタヤル語	kilux	熱い/暑い	静態動詞
9	mutasuru	吐く	○	○	○	アタヤル語	muta'	吐く	動詞
10	ucusuru	打つ	×	△	○	日本語	うつ	打つ	動詞
	(ucu)		○	○	○				
11	korosuru	殺す	○	○	○	日本語	ころす	殺す	動詞
	(korosu)		○	△	×				

※○は全員使用、△は使用しないインフォーマントがいること、×は全員不使用を示す。
※kiluxはkiloxと表記されることもある。

日本語における「する」は独立した意味を持つ動詞で、名詞と結びついて複合動詞を作るのに対して、宜蘭クレオールではsuruは「する」という意味の動詞としては使われず、拘束形態素で、実質的な意味を持たない。言い換えれば、宜蘭クレオールのsuruは動詞ではなく接辞で、kusisuruなどは派生動詞であり、複合動詞ではないということになる。

「する」は名詞のみならず、tangkisuru‘怒る’、kiluxsuru‘温める’など形容詞（アタヤル語では「静態動詞」とされる）に付いてそれを動詞化することもできる。また、日本語由来の動詞の多くはそのまま動詞として使われているが、ucusuru‘打つ’などのように-suruを取

る場合もある。なお、‘殺す’のような「す」で終わる語は、korosuruのように「す」の部分がsuruに置換される傾向がある。これは動詞の語尾を-suruに統一しようとする動きの一環である。

ただし、ucusuru‘打つ’は、三世のGMT・DFTや四世のBFF・YFFなど若い世代にみられるものである。二世のKFS・HFSと三世のSFTはそのような使い方は間違いだと批判していることから、若い世代による動詞化手段の改新が見て取れる。また、yumesuru‘夢を見る’やbakusuru‘タバコを吸う’、korosuru‘殺す’は、二世･三世･四世ともに使うものであるが、二世はyume miru‘夢を見る’、二世と三世のSFTはtabako suw‘タバコを吸う’、二世と三世のSFT・AMT・GMTはkorosu‘殺す’も使用する。ここから、三世代ともにsuruを動詞化の接辞として使っているが、後の世代ほどsuruを多用する様子がわかる。-suruが動詞化マーカーになりつつあるわけである。

5.2　複合

二つあるいは二つ以上の語基の結合によって形成される語を複合語と言うが、宜蘭クレオールには次のような複合語がみられる。

(2)

宜蘭クレオールの形式	由来言語	逐語訳	意味	使用者		
				二世	三世	四世
hopa-la'i	アタヤル語-アタヤル語	大きい-子供	長男/長女	○	○	○
ya'eh-tegan	アタヤル語-アタヤル語	悪い-みため	醜い	○	○	○
hopa-tenki	アタヤル語-日本語	大きい-天気	好天	○	△	○
myasa-unme	アタヤル語-日本語	良い-運命	幸運	○	○	○
king-papak	日本語-アタヤル語	金-耳	ピアス	○	○	○
naka-lukus	日本語-アタヤル語	中-服	下着	×	○	○
naka-pangcyu	日本語-日本語	中-パンツ	パンツ	×	○	○
unme-zyoto	日本語-日本語	運命-上等	幸運	○	○	○

※○は全員使用、△は使用しないインフォーマントがいること、×は全員不使用を示す。
※la'iはla'iyと表記されることもある。

これらの複合語は、要素の出自によって下記の４つのタイプに分けることができる。

タイプ１：アタヤル語由来の単語＋アタヤル語由来の単語（例：hopa-la'i、ya'eh-tegan）
タイプ２：アタヤル語由来の単語＋日本語由来の単語（例：hopa-tenki、myasa-unme）
タイプ３：日本語由来の単語＋アタヤル語由来の単語（例：king-papak、naka-lukus）

タイプ４：日本語由来の単語＋日本語由来の単語（例：naka-pangcyu、unme-zyoto）

複合は生産的な語形成プロセスとして多くのクレオールで観察されているものである（Mühlhäusler 1985、Holm 2000）が、宜蘭クレオールでは生産的ではないようである。なお、上記の複合語のうち、「長男/長女」はoki kodomoとも言う。「下着」と「パンツ」は、三世と四世はnaka-lukusとnaka-pangcyuを使うのに対して、二世はこれらを使わず、naka no lukusとnaka no pangcyuと表現する。

5.3 短縮

短縮とは語形成の一種で、語を短縮することによって新しい単語を作り出すことを言う。例えば、examはexamination、adはadvertisementの短縮である（Crystal 1994：67）。宜蘭クレオールには、下記のように短縮によって形成された語がみられる。

(3)

形式	意味	使用者		
		二世	三世	四世
baku	タバコ	○	○	○
muri	かたつむり	○	○	○
kosi	すこし	○	○	○
osi	おいしい	×	○	○
tari	わたしたち（包括的複数）	○	○	○
wataci	わたしたち（除外的複数）	×	△	○
antaci	あんたたち	○	○	△
ntaci	あんたたち	×	△	○
ataci	あれたち	×	△	○

※○は全員使用、△は使用しないインフォーマントがいること、×は全員不使用を示す。
※muriはmuliと発音されることもある。

(3) におけるbakuは「タバコ」、muriは「つむり」、kosiは「すこし」、osiは「おいしい」、tariは「ふたり」、wataciは「わしたち」、antaciは「あんたたち」、ataciは「あれたち」など日本語由来の語が短縮され、形成されたものである。baku・muri・kosi・tariは一モーラ目が、osi・wataci・ntaci・ataciは二モーラ目、antaciは三モーラ目が落ちて形成されたものである。人称代名詞のwataci・antaci・ntaci・ataciは、-taciの前のモーラが省略されるという共通点がみられる。

「短縮」はすべての世代にみられるが、語によって、使用する世代が異なることもある。例えば、「おいしい」のことを、二世はoisiと言うが、ほかの世代は短縮形osiを使う。また、一人称の除外的複数形として、二世と三世はwasitaciなどを用いるが、三世の一部と四世は短縮形のwataciを使う。二人称複数形については、二世と三世、四世の一部はantaciを使うが、三世の一部と四世はantataciから変化したntataciの短縮形のntaciを使う。後の世代ほど短縮形を用いているのである。

なお、二世と三世の一部は、短縮形のほかに、tabako/tbaku‘タバコ’、cumuri‘蝸牛’、sukosi‘すこし’、antataci‘あんたたち’も使用する。

6．意味の変容

上層言語由来および基層言語由来の語彙項目には、形も意味ももとのままで用いられるものもあれば、意味を変容させて使われるものもある。ここでは、意味の拡大と意味の縮小について見ることにする。なお、以下に挙げるアタヤル語の用例およびグロスは、江ほか（2009）や江氏のご教示をもとにしたものである。

6.1　意味の拡大

意味の拡大とは、ある形式の指示対象となることのできる事物の範囲の拡大（亀井ほか1996）である。宜蘭クレオールには、日本語由来の形式によって把握される指示対象の範囲が拡大される語が多く観察される。そのような意味の拡大には、アタヤル語の再語彙化によるものも少なくない。いくつか例を掲げる。

まず、(4) は日本語「あける」由来の形式akeruの使用例である。

日本語では、「あける」は、ふさいでいる物などを取り除くといった意味で「ドアをあける」「口をあける」「目をあける」が用いられるが、スイッチなどを入れるといった意味では「電灯をつける」「テレビをつける」「ガスをつける」のように「つける」が使用される。一方、宜蘭クレオールでは、ドアや口、目を「あける」ことも、電灯やテレビ、ガスを「つける」こともすべてakeruという動詞が使われている。akeruは日本語由来の形式であるが、日本語とは異なる用い方をするのである。では、なぜ宜蘭クレオールではこのような用い方がなされるのか。それは基層のアタヤル語の用い方によって明らかとなる。

(4) から、アタヤル語においては、ドアや口、目を「あける」ことも、電灯やテレビ、ガスを「つける」こともすべてgmyahという動詞が用いられることがわかる。宜蘭クレオールのakeru は語彙供給言語の日本語からその形を借りたのであるが、語義は基層のアタヤル語由来なのである。この点は再語彙化仮説（Relexification Hypothesis）によって説明できよう。

(4)

宜蘭クレオール				アタヤル語	日本語
形式	二世	三世	四世		
lihun(lihung) akeru	○	○	○	gmyah 'lu あける ドア	ドアをあける
ngowa akeru	○	○	○	gmyah ngowa あける 口	口をあける
royi akeru	○	○	○	gmyah royi あける 目	目をあける
dengki akeru	○	○	○	gmyah renki あける 電灯	電灯をつける
tensu akeru	○	○	○	gmyah teribi あける テレビ	テレビをつける
gasu akeru	○	○	○	gmyah gasu あける ガス	ガスをつける

※○は全員使用を示す。

再語彙化については、Lumsden（1999：225）が、「心的プロセスであるが、それによって言語学習者が新しい形式に自分の母語にある統合的・意味的情報を盛り込み、新しい語彙（名詞、動詞、形容詞、前置詞、副詞など）を作り出す」[10]と定義している。宜蘭クレオールのakeruは日本語の形をしているものの、実はアタヤル語のgmyahの置き換えなのである。このような基層のアタヤル語の語彙置き換えによる動詞にはほかに例えば (5) のようなものがある。

(5)

宜蘭クレオール				アタヤル語	日本語
形式	二世	三世	四世		
gako iku 学校 行く	○	○	○	musa p'wasan biru 行く 学校	学校に行く
ngasan(ngasang) iku 家 行く	○	○	○	musa sali 行く 家	家に帰る
ngasan(ngasang) kaeru	○	△	×		

※○は全員使用、△は使用しないインフォーマントがいること、×は全員不使用を示す。

(5) に示すように、宜蘭クレオールでは日本語の「行く」を取り入れた動詞ikuがあり、日本語同様gako iku‘学校 行く’のように使われている。ただし、そのikuはngasan(ngasang) iku‘家 行く’のように「家に帰る」の意味にも使われている。基層のアタヤル語の使い方

に照らし合わせると、ikuはまさにアタヤル語のmusaの置き換えなのである[11]。なお、二世はngasan ikuのほかにkaeru‘帰る’も使っているが、三世はngasang ikuの方を使用する人が多く、四世はngasang ikuしか使わない。

ところで、宜蘭クレオールの語彙の中には、一見基層言語から語彙の置換えが行われたようで、実は再語彙化だけでは説明できない現象もある。(6) によって、日本語の「男」由来の形式otokoを見てみよう。

(6)

宜蘭クレオール	**日本語**	**アタヤル語**
otoko	男	likuy
‘男性（人間）’	‘男性（人間）’	‘男性（人間）’
‘雄（動物）’		‘雄（犬）’
‘夫’		‘夫’

日本語の「男」は「男性」を意味するが、宜蘭クレオールでは「男性」「雄」「夫」すべてをotokoで表している（真田・簡 2012）。これはすべての世代に共通する。

宜蘭クレオールでは、日本語由来のokotoにアタヤル語のlikuyの意味（男性、雄、夫）が取り込まれているのである。これは、上述の再語彙化理論で解釈できる現象である。ただし、otokoの意味用法には (7) のように基層言語の影響では説明できないものもある。

(7)

宜蘭クレオール				アタヤル語	日本語
形式	二世	三世	四世		
otoko no hoying	○	○	○	likuy hoyin(hoying)	‘雄の犬’
otoko no welung	○	○	○	tingan welung	‘雄鳥’
otoko no biyak	○	○	○	kthuk biyak	‘雄の豚’

※○は全員使用を示す。
※村によっては、kthukをthokやtohokと言うこともある。

(7) に示すように、アタヤル語では‘雄の犬’にはlikuyが修飾語として用いられてlikuy hoyinとなるが、‘雄鶏’の場合はtinganが、‘雄の豚’の場合はkthukが用いられ、修飾語が動物の種類によって異なるのである。tingan hoyinやkthuk hoyinでは不適格になる。また、kthuk welungとtingan biyakも許容できない。これはアタヤル語で「雄鶏」や「雄の豚」における修飾語と主要部との共起関係に制限があるためである。

それに対して、宜蘭クレオールでは、修飾語のotoko‘男’はhoying‘犬’、welung‘鶏’、biyak‘豚’すべてと共起できる。宜蘭クレオールのotokoは、犬だけでなく、鶏や豚についてまでその意味が拡大されたのである。

意味の拡大の変化は、ほかに例えば、「閉める」「閉じる」「消す」などの意味で使われるsimeru/katangsuruにもみられる。

(8) に示すsimeruは日本語由来、katangsuruはアタヤル語由来[12]である。日本語では、ドアなどは「閉める」、口や目などは「閉じる」、電灯やテレビ、ガスなどは「消す」と使い分けるが、宜蘭クレオールでは、それらは日本語由来のsimeruもしくはアタヤル語由来のkatangsuruが用いられる傾向がある。

(8)

宜蘭クレオール			アタヤル語	日本語
二世	三世	四世		
lihun simeru	lihun(lihung) simeru/katangsuru/la'angsuru	lihun(lihung) katangsuru	k'lu 'lu しめる ドア	ドアを閉める
ngowa(kuci) simeru/tomasu/mkansuru	ngowa(kuci) simeru/katangsuru/mkansuru	ngow(kuci) katangsuru	sotun ngowa 閉じる　口	口を閉じる
royi(me) cuburu/kminsuru	royi(me) simeru/katangsuru/kminsuru	royi kimisuru/katangsuru	kmin ro'iy 閉じる　目	目を閉じる
dengki simeru/kiyasu	dengki simeru/katangsuru/kiyasu/la'angsuru	dengki katangsuru	katan renki (muyut) 消す　電灯	電灯を消す
tensu simeru/kiyasu	tensu simeru/katangsuru/kiyasuru/la'angsuru	tensu katangsuru	katan teribi (muyut) 消す　テレビ	テレビを消す
gasu simeru/tomasu/kiyasu	gasu simeru/katangsuru/kiyasu/tomasu/la'angsuru	gasu katangsuru	katan gasu (muyut) 消す　ガス	ガスを消す

アタヤル語では、ドアなどはk'lu、口はsotun、目はkmin、電灯やテレビ、ガスはkatan(muyut)を使っている。その使い分けは日本語よりも複雑である。ここから、宜蘭クレオールのsimeruあるいはkatangsuruの使い方は前述のakeruなどのような、基層のアタヤル語からの語彙の置き換えでは説明できないことになる。

日本語から形を借りたsimeruもアタヤル語から形を借りたkatangsuruも、日本語ともアタヤル語とも異なり、いずれもその意味範囲を拡大したのである。このsimeru/katangsuru の意味範囲の拡大の動機としては、上述のakeru との対応関係による単純化が考えられる。

ただ、二世は「口を閉じる」の項ではsimeruとtomasu[13]、mkansuru、「目を閉じる」の項ではsimeruではなく、cuburu（「瞑る」）とkminsuruを使用する。また、「電灯を消す」「テレビを消す」の項ではsimeruのほかにkiyasu[14]、「ガスを消す」の項ではsimeruのほかにtomasuとkiyasuを併用する[15]。三世は「口を閉じる」の項ではsimeruとkatangsuru、mkansuru、「目を閉じる」の項ではsimeru/katangsuruのほかにkminsuru、「テレビを消す」の項ではsimeru/katangsuruのほかにkiyasuから変形したkiyasuruを使う。ただし、三世のAMTはkatangsuruを使わないのに対して、GMTはkatangsuruを専用している。また、la'angsuruの使用は三世のAMTのみである[16]。四世は「目を閉じる」の項ではkatangsuruのほかにアタヤル語由来のkminsuruから変形したkimisuruを使うが、ほかの項ではkatangsuruを専用している。この範疇においては、バリエーションが多様で、後の世代ほど「意味の拡大」の変化が進行していることがわかる。

6.2　意味の縮小

前述の意味の拡大とは逆に、形式の指示対象の範囲の縮小も観察される。(9) にその例として「洗う」を示す。

(9)

宜蘭クレオール			アタヤル語	日本語
二世	三世	四世		
lukus mahusuru/ sentakusuru/ kimono araw	lukus mahusuru/ lukus sentakusuru	lukus mahusuru	mahu' lukus 洗う　服	着物を洗う/ 洗濯する
memasuru	memasuru(pemasuru)	memasuru(pemasuru)	mema(pema) hi 洗う　体	体を洗う
reyas(kao) araw	reyas(kao) araw	reyas(kawo) araw	mema(pema) reyas 洗う　顔	顔を洗う
'ba(te) araw	'ba araw	'ba araw	mema(pema) 'ba 洗う　手	手を洗う
kakay(asi) araw	kakay araw	kakay araw	mema(pema) kakey 洗う　足	足を洗う
cyawang(pyatu) araw	cyawang(pyatu) araw	pyatu araw	'mwax pyatu 洗う　茶碗	茶碗を洗う

アタヤル語では、着物などを洗う場合はmahu、身体部位を洗う場合はmema(pema)、茶碗など器物を洗う場合は'mwaxと使い分けられる。日本語では、水で汚れを落とすこと全般を「洗う」と言うが、着物などを洗う場合は「洗濯する」とも言う。宜蘭クレオールでは、日本語「洗う」由来のarawや「洗濯する」由来のsentakusuru、およびアタヤル語由来のmahusuruや

memasuru（pemasuru）が取り込まれているが、その使い分けについて見てみよう。

「着物を洗う」の動詞にはアタヤル語由来のmahusuruと日本語由来のsentakusuru・arawが併用されている。「体を洗う」の動詞は、アタヤル語mema（pema）由来のmemasuru（pemasuru）が使われている。アタヤル語のmema（pema）は、体だけではなく顔・手・足などにも使えるが、宜蘭クレオールのmemasuru（pemasuru）は体に限定される。顔・手・足は日本語由来のarawが使われる。宜蘭クレオールにおけるmemasuru（pemasuru）の意味範囲は由来言語のアタヤル語より狭い。意味の縮小が生じているのである。また、「体を洗う」場合は、memasuru（pemasuru）が専用されることから、日本語由来のarawの意味も縮小していると言える。なお、「着物を洗う/洗濯する」の項では、二世はarawも使うが、三世と四世はarawを使わない。このことから、三世と四世のarawの意味は、二世よりも縮小していることがわかる。

もう一つ例を見よう。

（10）

宜蘭クレオール			アタヤル語	日本語
二世	三世	四世		
tobu	tobu	tobu	kotung	跳ぶ
tobu/lakasuru	lakasuru	lakasuru	laka	飛ぶ

アタヤル語ではkotungが「跳ぶ」を、lakaが「飛ぶ」を意味するが、日本語では「とぶ」で「跳ぶ」と「飛ぶ」の両方の意味を表す。宜蘭クレオールでは、二世の場合、tobuが由来言語と同様に「跳ぶ」と「飛ぶ」に使えるが、三世と四世は、tobuは「跳ぶ」、lakasuruは「飛ぶ」として用いる。三世と四世のtobuの意味範囲は、由来言語の「とぶ」の意味範囲よりも縮小している。その結果、tobuは「跳ぶ」に、lakasuruは「飛ぶ」にといった相補分布をなすことになり、形式と意味の透明化がはかられたのである。

なお、アタヤル語のkotungは、宜蘭クレオールでは、例えば、la'i kotungkotungsuru‘子供が跳び跳びする’のような表現において使われる。

7．まとめ

以上、本稿では宜蘭クレオールの語彙について、東岳村の三世代のインフォーマントから得たデータに基づいて考察を行なった。その結果、次のようなことが明らかになった。

まず、二世などのデータを加えて語彙の使用を再検討した結果、宜蘭クレオールは日本語を

上層言語（語彙供給言語）、アタヤル語を基層言語、華語と閩南語を傍層言語とするクレオールであることが再確認された。そして、語彙項目の意味領域の分布から、アタヤル語由来の形式は特に身体名称に関連する語彙項目、日本語由来の形式は特に代名詞と機能語に多いことがわかった。なお、宜蘭クレオールの日本語起源の語彙は基本的に標準日本語であるが、西日本方言形式も取り入れられている。

語形成に関しては、派生、複合、短縮について検討し、-suruが動詞化マーカーになりつつあることや、新しい複合語と短縮語が存在することを確認した。また、いくつかの語彙項目を取り上げ、上層言語由来の語に基層言語由来の意味が取り込まれ、再語彙化を含めた意味の拡大、意味の縮小といった変化を起こして、語彙の新体系が作り上げられている様相を明らかにした。さらに、世代間のバリエーションから、若い世代ほど、-suruや短縮語の使用、意味の拡大や縮小といった新しい変化（改新）が進んでいることがわかった。

本稿で明らかにしたことに基づいて、今後は宜蘭クレオールの語彙の全体像を明らかにしていきたい。

注

1　「アタヤル」は日本語で「タイヤル」とも称され、英語ではAtayalが一般的である（土田1988）。「セデック」は英語ではSeediq、Sediq、Seedeq などいくつかの書き方がある。

2　2018年２月現在、４村の人口は合計3,225人である。その内訳は東岳村558人、金洋村602人、澳花村938人、寒渓村1,127人である（http://hrs.e-land.gov.tw/）。

3　アタヤル語表記法は、台湾行政院原住民族委員会および教育部が2005年12月に公布したものである。

4　閩南語表記法は、教育部が2005年12月に公布したものである。

5　セデック語もかかわっていたと推測されるが、これまでのところ、宜蘭クレオールにセデック語の影響はほとんど観察されない。それにはセデック人がマイノリティであったことが関与していると考えられる。台北帝国大学土俗人種学研究室（1935）によれば、1930年代における南澳地域の人口は1,692人で、戸数はMəbəala：220戸（34.9％）、Kəna-Xaqul：280戸（44.4％）、Tausa：90戸（14.3％）、Mənebo：40戸（6.3％）とされている。このうち、MəbəalaとMənebоはアタヤル語ツオレ方言を、Kəna-Xaqulはアタヤル語スコレック方言を、Tausaはセデック語タウサー方言を用いる人々である。したがって、合わせて630戸（ただし、原文では633戸とされている）のうち、アタヤル人の戸数はMəbəalaとKəna-XaqulとMənebоの計540戸、85.7％になる（Chien & Sanada 2010では、原文のパーセントをそのまま加算して、アタヤル人は85.6％と記した）。なお、台北帝国大学土俗人種学研究室（1935）は移川ほか（1935）とも記されることがある。

6　語彙の数を増やしたり、異なる意味分野の語彙を取り入れたりして調査をすると、由来言語の比率は自ずと変わってくる。インフォーマントが違うと結果も異なってくるはずである。Chien & Sanada（2010）では、一人のインフォーマントの語彙を取り上げて日本語由来とアタヤル語由来の比率を報告しているが、個人語彙における言語相や語彙量の計数についての考え方に関しては、真田（2015）に解説がある。

7　意味分野の分類は土田（2000）を参考にした。

8　二世はngasan、三世と四世はngasangと発音する傾向がある。

9　これらのスコレック方言由来の単語は、金岳村など近隣の村の「宜蘭ツオレアタヤル語」にもみられる。「宜蘭ツオレアタヤル語」はツオレ方言でありながらスコレック方言の単語も取り入れているのは、アタヤル語のなかでの方言接触による結果であろう。

10　“a mental process that allows a language learner to create a new vocabulary of lexical categories（i.e. nouns, verbs, adjectives, prepositions and adverbs）by linking new phonological forms with syntactic and semantic information that is already established in the lexicon of his native language.”

11　傍層の華語と閩南語では、「学校に行く」はそれぞれchu（去）とkhi（去）、「家に帰る」はhui（回）とtng（轉）という動詞が用いられるため、このような使用は傍層言語からの影響ではないことがわかる。

12　katangsuru はアタヤル語のkatan に-suru が付加された派生動詞である。アタヤル語から取り入れた単語であるが、鼻音のn［n］がng［ŋ］になるような変化が生じている。

13　tomasu の語源は不明であるが、「とめる」から変形した可能性がある。

14　kiyasu‘消す’は西日本方言「消やす」由来である。

15　二世のHFSはスイッチや装置のあるものをkiyasu、ドアなどをsimeruと使い分けているが、KFSはスイッチや装置のあるものについてはkiyasuよりtomasuを多用し、simeruも使えると内省している。

16　三世のAMTは「しめる」としてla’angsuruを多用している。このla’angsuruはアタヤル語のk’lu‘しめる’から派生したk’la’an‘しめられたもの’に由来する形式と思われる。

謝辞

フィールドワークにご協力いただいたインフォーマントの方々および江明清牧師、そして、原稿作成に際しご助言くださった真田信治先生、渋谷勝己先生、佐竹久仁子先生に、心よりお礼申し上げる。

参考文献

安部清哉・土田滋・新居田純野（2008）「研究ノート アタヤル語（泰雅語）の寒渓方言に入った日本語 ―台湾原住民言語能力試験問題における―」『東洋文化研究』10：696-730.

亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）（1996）『言語学大辞典 第６巻 術語編』東京：三省堂.

川見駒太郎（1942）「台湾において使用される国語の複雑性 ―附方言の発生―」『日本語』3：32-39.

簡月真（2011）『台湾に渡った日本語の現在―リンガフランカとしての姿』東京：明治書院.

簡月真・真田信治（2010）「東台灣泰雅族的宜蘭克里奥爾」『台灣原住民族研究季刊』3(3)：75-89.

宜蘭廳（1918）『宜蘭廳統計要覽 大正五年』宜蘭：宜蘭廳.

黄美金（2000）『泰雅語參考語法』台北：遠流.

江明清・荘仁実・呉元和・曹天瑞（編）（2009）『宜蘭澤敖利泰雅族語言圖解式小辭典』宜蘭：宜蘭縣原住民文教促進會.

真田信治（2015）「宜蘭クレオールの「衣・食・住」語彙について」『語彙研究』12：9-16.

真田信治・簡月真（2007）「台湾アタヤル族における日本語クレオール」日本語学会2007年春季大会口頭発表。関西大学、５月27日.

真田信治・簡月真（2008）「台湾における日本語クレオールについて」『日本語の研究』4(2)：69-76.

真田信治・簡月真（2012）「宜蘭クレオール」『国語研プロジェクトレビュー』3：38-48.

台北帝国大学土俗人種学研究室（移川子之蔵・宮本延人・馬淵東一）（1935）『台湾高砂属系統所属の研究』東京：刀江書院

台湾総督官房臨時国勢調査部（1937）『昭和十年国勢調査結果表』台北：台湾総督官房臨時国勢調査部.

土田滋（1988）「アタヤル語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典　第１巻世界言語編（上）』175-179. 東京：三省堂.

土田滋（2000）「残った 残った！の言語学（言語が消える時―台湾原住民の言語の場合）」『仙人の会』口頭発表. 法政大学、12月17日.

Chien, Yuehchen（2015）The Lexical System of Yilan Creole. In *New advances in Formosan linguistics*, ed. by Elizabeth Zeitoun, Stacy F. Teng and Joy. Wu, 513-532. Canberra: Asia-Pacific Linguistic.

Chien, Yuehchen, and Shinji Sanada（2010）Yilan Creole in Taiwan. *Journal of Pidgin and Creole Languages* 25.2：350-357.

Craig, Colette Grinevald (1997) Language contact and language degeneration. In *The handbook of sociolinguistics*, ed. by Florian Coulmas, 257-270. Blackwell Handbooks in Linguistics 4. Oxford: Blackwell.

Crystal, David (1994) *An encyclopedic dictionary of language and languages*. London: Penguin.

Hancock, Ian F (1980) Lexical expansion in creole languages. In *Theoretical orientations in creole studies*, ed. by Albert Valdman and Arnold Highfield, 63-88. New York: Academic Press.

Holm, John. (2000) *An introduction to pidgins and creoles*. Cambridge Textbooks in Linguistics. Cambridge: Cambridge University Press.

Lumsden, John S (1999) The role of relexification in creole genesis. *Journal of Pidgin and Creole Languages* 14.2：225-258.

Mühlhäusler, Peter (1985) The lexical system of Tok Pisin. In *Handbook of Tok Pisin (New Guinea Pidgin)*, ed. by Stephen A. Wurm and Peter Mühlhäusler, 423-440. Pacific Linguistics C-70. Canberra: Australian National University.